

わがまち歴史散歩

幕末池田の疫病対策

○人は病気に悩まされる

人間は、時代が進化し、知識が豊かになっても、病の悩みからは自由になれないようです。池田について記録をひもといてみましょう。

寿命寺の縁起絵では、天平年間(729～749)に疫病(伝染病)が全国的にはやり、行基が呉庭の神願寺薬師仏に祈りました。すると、7日後に疫病は去ったというのです。もちろん、伝承であって、歴史的事実かどうかは分かりません。ただ、縁起絵が描かれたとされる江戸時代、池田の人々は、古代の人々も疫病には悩まされていたとの歴史認識を持っていたことは間違いありません。そういえば、旧村落への出入りに地蔵や青面金剛の碑が建っているのもしばしば見掛けます。これは、疫病など集落への災厄をもたらず目に見えない侵入者を恐れ、阻止しようとする当時の人々の気持ちを示していると考えられています。

ちなみに、元禄10年(1697)、人口5千人の池田の町に医師はすでに15人いました(『新修池田市史』第2巻242ページ)。

表34)。多くの医師たちは、病気や疫病にどう対峙したのでしょうか。

○『伊居太神社日記』の記述

『伊居太神社日記』には江戸時代の池田の町の人々の暮らしや考えを知る上で本場に貴重な材料があふれています。病気の記述も実はたくさんあるのです。一例として、幕末の嘉永2年(1849)の記述を見てみましょう。

この1年間で病気については20件の記事がありました。罹病者は10人です。この10人のうち成人と推測できるのが2人、幼児と思われるのが8人。この8人の幼児のうち5人が疱瘡ほうそうにかかり、死亡は2人、回復は1人、結果の記載なしが2人です。残る3人も明記はないのですが疱瘡の罹患りかんを推測できます。この3人については死亡が2人、結果の記載なしが1人となっています。

疱瘡というのは天然痘のこと。恐ろしい病気でした。緒方洪庵が京都に伝わっていた分苗を入手し、大坂で除痘館を開いたのは嘉永2年のこと。

予防の決め手となる牛痘実施に向けて奮闘し始めたころです。

この年、池田でも疱瘡が流行し、幼児を中心に死亡者が出ていたことは明らかです。もともと、『伊居太神社日記』の記載は、あくまで宮司が関わった範囲に止まっており、池田全体の像は明確ではありません。それでも、この年の天然痘流行を推測しても間違いではないでしょう。

○医者に掛かるといふこと

池田に住む人々の子どもが病気に罹かかると、知り合いである宮司は饅頭まんじゅうやしんこなど、お見舞いの品を贈りました。また、病死したときには、葬式に懃まじなどを贈りました。付き合いてもあるし、親の悲しみを慰める行為でもあったの

でしょう。

この年の疱瘡には、宮司の子らしき人物(おそらく幼児)も罹っています。宮司は、その病状に対応し、やったことをその都度記述しています。

その記録は、閏4月29日の発病から始まり、5月5日の赤飯配り、5月8日の神送り、11月10日の再発熱、11月11日の医師・永井の診察、11月27日の全快、赤飯配りといったように8回にわたっています。11月11日には、永井だけでなく別の医者にも診察を頼んでいます。右のうちには、治療ではなく、まじないとしか言えないものもありますが、子を思う親は何でもしたのでしょうか。

ところで、町全体では子が発病しても医師を呼ばなかった親もいたことを考えておくべきでしょう。また、池田ではこの翌年嘉永3年1月に医師・高橋由珊と高橋由吉の両名が除痘館の分苗所を結社し、牛痘普及をめざしています(『新修池田市史』第3巻258ページ)。彼らはどんな苦心を重ねたのでしょうか。

(市史編纂委員会委員長・小田康徳)

◆問い合わせは生涯学習推進課
☎754・6674



緒方洪庵肖像(大阪大学適塾記念センター所蔵)